一念

雲虎為吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一念

【Ｎコード】
Ｎ８５４８Ｃ

【作者名】
雲虎為吉

【あらすじ】
人里離れた山の中、一仕事後の酒盛りをしている山賊たちの前に突然男が…。

その１（前書き）

はじめて投稿します。つたない文章ですが、最後まで読んでいただけると幸いです。

その1

ここは人里離れた山の中。あたりはうっそうと茂る木々ばかり。空を見上げるとたくさんの星が輝いている。この星明りで何とか歩けるぐらいの暗さの山の中。道も獣道しかなく、普通なら入ることさえためらわれる山の中にほのかに明かりが見える。どうやら焚き火の明かりのようだ。

焚き火の周りには、人相の悪い男たちが3人あぐらをかいて座っていた。

「しかし、今夜はいい稼ぎができましたね、親分。」

男は、妙ににやけた顔で親分と呼んだ男のコップに酒を注ぎながらそう言った。

「ああ、まったくだ。こんな人里離れた山の中に、あんな親子が通りかかるとはなあ。しかも、こんなお宝を持ってよお。本当に笑いが止まらないぜ。フハハハハ。」

そう言いながら、親分と呼ばれた男は、薄汚い服の懐から自分の握りこぶしぐらいの大きさの袋を取り出し、袋の口を開いた。

袋の中には金貨が入っていた。

「これで当分は金の心配をしなくてすむぜ。なあ、劉。」

しかし、劉と呼ばれた男は、だまってコップの中の酒をグイと一気に飲み干し、左側に置いてある剣に目をやった。剣は日本刀のようで、黒い鞘に入れられていた。

「へへへ、劉の兄貴も今日ぐらいは少しはニコリとしたらどうですか。大金が手に入ったんですよ。大金が。」

「金か…。興味ないな。俺は人が切れればそれでいい。あんたらは大金を手に入れた。ということは、当分は今の稼業をやらないということだ。人を切らないあんたらとつるんでいても意味が無い。ここでお別れだ。じゃあな。」

「ま、待ってくれよ、兄貴。本気なのか。」

「本気さ。」
「そんな、冗談だろう。普段はぶすっとして、冗談なんて言いません、みたいな顔をしているのに。こんな時に最高の冗談を言うとは、びっくりしちまうよ。」
「何度も言わせるな。俺は本気だ。じゃあな。」
「待て、劉。」
それまで黙って二人の話を聞いていた親分が声をかけた。
「本当に行っちまうのか。」
「ああ。」
「そうか、寂しくなるが仕方ないな。」
親分はそう言いながら、金貨の入った袋から半分の金貨を取り出すと、それを別の袋に取り分け、劉の目の前に突き出した。
「お前の取り分だ。持って行きな。」
「少し、多いようだが。」
「多い分は、俺からの餞別だ。」
「そうか、ではいただいていくとしよう。」
そう言うと、劉は突き出された袋を受け取ると袋の口を開き、そこから3枚の金貨を取り出し懐の中にしまい、
「では、これは俺からの餞別だ。」
と言って、袋を親分に渡した。
「あんたには世話になったからな。」
「いいのか。」
「ああ、後は二人で分けてくれ。」
「そうか、じゃあ遠慮なくいただいておくよ。」
親分はそう言って、袋を受け取った。
「じゃあ、俺は行くよ。」
そう言って、劉は立ち上がり闇の中に消えていった。
「あっ、行っちまった。この辺りは山犬が出るっていうのに、大丈夫かなあ、兄貴。」
「あいつなら、大丈夫さ。山犬の１０や２０どうってことないさ。

それよりも、俺たちの分け前が増えたことを祝って飲み直しといこうぜ。」
「そうですね、親分。」
山の中の二人だけの酒盛りが始まった。

酒盛りが始まってから1時間ぐらいが経っただろうか。突然、近くの茂みがガサガサと音を立てた。
びっくりして音のした方向を見る親分たち。それまでのほろ酔い気分がどこかに吹き飛んでしまった。
茂みはなおもガサガサと音を立てている。二人はゆっくりと立ち上がり、それぞれ刀を手に取った。刀は青龍刀のような刀だ。
茂みの音はさらに大きくなった。親分の方はじっと音のする方向を睨んだままであるが、子分の方は額にうっすらと汗を浮かべ、手もわずかに震えているようである。
ガサッという大きな音とともに黒い影が茂みからのそりと出てきた。
「うわあ。」
情けない声を出して子分の方が後ろに飛びのいた。親分の方は黒い影から目を離さずにじっと見ていた。
黒い影は声のした方向に向き直った。焚き火の明かりに照らされた黒い影は、一人の男の姿になった。男の身長は１５０センチぐらいの小男であった。
「失礼しました。どうやら驚かせてしまったみたいですね。」
その声は、静かだがよく通る声であった。
男はそう言って軽く頭を下げ、その場を立ち去ろうとしたが、その時、
「ちょっと待て。」
突然、親分が男を呼び止めた。
「お前のせいで俺たちは寿命が縮んじまったんだ。お詫びに、お前

がその脇に差している刀、そいつを置いていってもらおうか。」
と言って、男の脇に差している刀を指差した。男の刀は、劉の刀と同じく日本刀のような形をしており、白い鞘に収められていた。
「これは預かり物ですのでお渡しできません。」
男は背中越しに親分を見ながら答えた。
「お前のような軟弱野郎が持っていても飾りにしかならないだろう。俺が使ってやるから置いて行きな。」
「なんなら力づくでも置いていかせるぜ。」
男の小柄なことを見て、子分の方も勢いづく。
「さっさとよこしやがれ。」
子分が男に飛びかかったが、次の瞬間、
「グエ。」
蛙が踏まれたような声を出し、子分が地面に倒れた。
男の右手には鞘から抜かれた刀が握られていた。刀は焚き火に照らされ、赤く輝いていた。親分はしばらくその美しさに見とれていたが、はっと我に返った。
「なかなかやるじゃないか。だが、俺はそいつの3倍は強いぜ。」
そう言い放ち、親分は男に切りかかった。しかし、男はすんでのところで親分の刀をかわした。間髪入れずに刀をかえして切りかかる親分。それも男はすんでのところでかわす。
そのうち、親分は完全に息があがってしまい、やがて呼吸をするのも苦しくなってしまったが、男は全く呼吸一つ乱れていなかった。
「ちくしょう、はあはあ…。このやろう、はあはあ…。ちょこまかちょこまかと動きやがっ、ゴホゴホ、ウエッ。」
どうやら、先ほどまで飲んでいた酒が逆流してきたようである。
「もういいかげんにあきらめたらどうですか。」
「うるさい。」
親分は男に切りかかったが、足がもつれてその場に倒れてしまった。
「これまでのようですね。それでは、わたしはこれで。」

、と言って男がその場を立ち去ろうとした時であった。突然茂みの中から小さな影が飛び出してきた。
「おっ父とおっ母のかたきだ。」
小さな影は、そう言いながら親分の頭に親分の頭ぐらいの大きさの石を叩きつけようとした。
「うわあ。」
もはや立てない親分は這いずってその一撃をかわし、小さい影の方向を見た。
「誰だ。」
小さな影の正体は１０才くらいの子供であった。
「フグオーッッ。」
言葉にならない声で、再び子供は手にした石で親分に襲いかかった。親分は、子供の攻撃をかろうじてよけると、男の足元にころがっていった。
「なあ、あんた助けてくれ。助けてくれたらこの金貨を全部やるぞ。どうだ。」
親分は懐から2つの袋を取り出し、男の足元に置いた。
「その金貨は、おいらのおっ父が新しい町で商売を始めるための元手になるお金だったんだ。それを、それを、よくもーっ。」
子供は親分の頭を目がけ石を振り下ろした。もうだめか、親分が観念して目をギュッと閉じたその時、赤いきらめきが子供の持っている石に集まったように見えたその時、突然子供の持っていた石が砕けた。
おそるおそる目を開ける親分。目の前には何が起こったのか理解できずに呆然と立ち尽くす子供がいた。
「フへ、フへへへへ。全く脅かしやがってこのガキが。この落とし前はどうつけてやるか。とりあえず、左腕から切り落としてやるか。さあ、旦那、早いとここのガキ、やっちゃってくださ…。」
親分の言葉は、男の赤いきらめきが首筋に吸い込まれると同時に途切れた。そしてその時にはもう男の刀は鞘の中に納まっていたの

だった。
「お前さん、名前は。」
男は、子供に問いかけた。
「刀…。」
「そうか、刀と言うのか。少し変わった名前だが悪くは無いな。」
「違う。あんたの刀を貸してくれ。おいらは、こいつらを殺さないといけないんだ。」
「殺さないといけない…、なぜだい。」
「こいつらは、おいらのおっ父とおっ母のかたきなんだ。おいらがこいつらを殺さないと、おっ父もおっ母も成仏できないんだよ。」
「では、お前のお父さんやお母さんがこいつらを殺してくれと言っているのかい。」
「そうだ。だから、おいらはこいつらを殺さないといけないいだよ。」
「そうかなあ。」
「なんだよ。違うとでも言うのかよ。」
「お前さん、年はいくつだい。」
「9つだよ。」
「9つか…。今、お前がこいつらを殺せば、今のお前の気持ちは晴れるだろう。しかし、必ずこのことを後悔する時が来る。お前さんの残りの人生が何年なのか、私にはわからない。しかし、そのような重荷を背負い込む生き方をお前さんのお父さんやお母さんが望んでいるとは思えないのだよ。亡くなったお前さんのお父さんやお母さんのためにも、お前さんにこいつらを殺させるわけにはいかない。」
「うううう…、うわーん」
子供はがっくりと膝をつくとその場に泣き伏してしまった。
それから1時間半ほど子供は泣き続けていた。男はずっと泣きじゃくる子供を見ていた。その距離は、べったり寄り添うでもなくか

といって離れすぎるでもなく、正に微妙な距離であった。
やがて、涙も枯れ果て子供はゆっくりと顔を上げた。それを見て男もすっと立ち上がった。
「それでは、行こうか。」
「えっ。」
子供は男の言っていることが理解できないようだった。
「お前のお父さんとお母さんが殺されたところだよ。まだ、遺体がそのままになっているんじゃないか。」
「あっ。」
子供ははっとした。この辺りは山犬が出る。もしもおっ父とおっ母の遺体が山犬に食べられてしまったとしたら…。考えただけでもぞっとした。
「おじさん、早く。」
「ははは、おじさんねえ…。私は呂と言うんだが…。」
「呂のおじさん、早く、早く。」
「はははは、まあいいか…。」
茂みの中を20分ほど掻き分けると水の流れる音が聞こえてきた。さらにしばらく進むと川原が見えてきた。川原には大小様々な石が転がっており、川の付近にこんもりとした山があった。子供はその山にゆっくりと近づいていった。呂もその後に続いた。
山に近づくにつれて、それがただの山ではないことがわかってきた。うっすらとした星明りに照らされ、浮かび上がった山の正体は、折り重なった3人の遺体であった。背格好から判断すると、父親、母親そして兄であろう。3人とも右肩からばっさりと袈裟懸けに切られていた。呂はゆっくりと遺体に手を合わせてから、3人の傷口にそっと触れた。一瞬、呂の顔が曇った。
2人は、3時間ほどかけて3人の墓を作った。石を積み重ねただけの貧相な墓ではあったが、川が良く見える高台に作られた墓であった。2人は星明りの中で墓に手を合わせた。手を合わせる呂の脇には白い鞘が土まみれになった刀がささっていた。道具は使わなけ

れば意味が無い、そう言って子供が止めるのも聞かず刀を使って穴を掘り続けた結果であった。
「呂は、これからどうするんだい。」
『おじさん、呂おじさんそして最後は呼び捨てか、まいいけどさ。』
「とりあえず朝まで仮眠をとるかな。そして、町に行く。こいつを届けないとな。」
そう言って、ポンと泥だらけの刀を叩いた。
「ええっ、それって届け物だったの。そんな泥だらけにして大丈夫なの。」
「たぶん大丈夫だと思う…。」
「なんだったら、おいらも付いて行って一緒にあやまるよ。呂はおいらの家族のためにその刀を使ってくれたんだから…。」
「9才の子供に同情されるとは…。私もヤキが回ったかな。」
「なんだよ、その言い草は。」
「ごめん、ごめん。じゃあ、お前さんにも一緒に来てもらおうかな。ところで、まだお前さんの名前を聞いていなかったな。」
「孫だよ。」
「そうか。じゃあ孫、明日はよろしく頼むよ。」
「まかしときな。そうと決まれば、早く寝ないとな、おやすみ、呂。」
そう言って、孫は墓の前にごろりと横になった。
『孫、まったく、お前さんはすごいやつだよ。自分の肉親が殺されたばかりだというのに、私に心配させないように気丈にふるまっている。がんばれよ、孫。』
ちらりと、孫の方を見ると、孫の肩が小刻みに震えていた。呂は、孫から離れた場所にごろりと横になった。
「おやすみ、孫。」
孫の返事は無かった。

その１（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8548c/

一念

2010年10月17日05時19分発行